

No. 308 BASTOS, 17 de FEVEREIRO de 1957 O PROGRESSISTA REF. No. 4576 S. Paulo A.P.

バストス週報

第百八十八号  
昭和卅二年  
二月廿七日  
発行

DIRETOR  
KOITI MORI

REDATOR  
SHION ODA

RUA PRES.  
VARGAS 188  
C. P. 112

BASTOS  
C. P.

ANUAL  
1000.

フタが、われる

のは、おもしろくない

来る二月二十四日午前中にバストス連  
合日本人会の總會が開かれ、午後は引続  
き医療協会の創立總會が行われる。  
従来は日本人会が病院を経営して来た  
が、これからは医療協会として独立した  
組織をもつこととなり、運営評議会とい  
う機関によって経営されることになる模  
様で、従って日本人会とは一応手が切れ  
ることになるわけだ。

では日本人会はどうなるか、これも文  
化協会という風に名称をかえて合法団体  
になる相であるが、これ迄の定款による  
と会長（その他の役員も）は二年の任期だ  
から、両協会の会長を兼務するは困難に  
なるかも知れない。

医療協会の運営評議会というものは産業  
組合の理事会に該当する。理事長、専務  
理事等が總會の公選による。決まるの  
に、評議会の方では議員九名が公選で会  
長は議員の互選という点がちがっている。  
のみならず任期が同じ議員でも三段に  
分かれていて、高点順に三名が六年、中  
の三名は四年、下位の三名は二年、吾々  
の常識では頗る奇異の感じのする選挙制  
だが、之れでなくして、いりない様な何  
か事由があるのかも知れない。しかし、う  
っかり高点で議員になり、互選で会長に  
も推されることを避けては、互選で会長に  
四年会長をして悲鳴を上げる位だから、  
二人と引き出されたら六年勤めのおぼろ  
ぬと考える会長が、いの人ならすくノイ  
ロいせになる。

さく如くになると谷口連日会長は、どう  
しても今期の任を終って再選に依らない  
と強調されるであろう。側近の人の談  
によると、二期以上会長を谷口氏に推し  
つけるのは酷だという、四年でもうんざ  
りするのには、今度再選でもされると、評  
議員の六年に比敵する御孝公だ、もうか  
んべんして貰いたいという。

今度の医療協会の評議員も高点者は六  
年である。うんざりしない人は、よほど  
の閑人であろう。

これは、そうした範例を作った人の意見  
の如何によらず、やはりにくい感じを最初  
から与えるもので再考を要する点である。  
谷口会長もこの新制六年もおそれを  
なしたと見る向きも多いようだが、どう

Alfaiatonia Imperial



丸山洋服店

貴金属 時計業

Relojaria Confianca T. Nakamura Tupa



中村時計店

信用第一とモットーとする  
ツパン市 ホントネロードピアオ前

あろうか。  
尤も熱意を以て病院の運営に当らねば  
なりぬと定款には命じてあるが、何かの  
都合で辞任をしてもはいけないとは言って  
ないのだから、熱意を失ったうさつとと退陣  
すればよい、という人もある。  
去る二月十日連日代議員会が開かれ、  
れたが、次期会長問題では谷口氏再選の  
空気が強かった相である。やはり移管問  
題を同氏の手に処理して貰いたい。全バス  
トス人の念願の表示であらう。  
ところが谷口氏が志しないので会議は  
碍壁にぶつかり、同席の理事は退場を乞  
われて、代議員のみの会議をつづけた。  
会キの内容は詳かでないが、谷口氏が受

けぬとすれば誰を推したものであろうと審議したと思われ。候補には久ロリア若田氏、バンネイランテ水島氏等の名が出たが結局まとまる所まで行かないで終了したと伝へられる。

その後会長候補詮考が行われて居ればよいが、現在ののまま、シヤツパなしで總會の席上ホットを投ずることになると、勢いアタは、はり／＼にわかれることになる。恐らく岩口、若田、水島、三氏がアタを合ける結果となるが、どうも面白からぬ表示となり相だと思われ。ある人が一友人の立場で水島氏の意向を打診したところ、例の百家談入れる水島構想実現に全身全霊を打ち込んでいるので、それ以上の仕事に手を添う暇はないことがわかったという事だった。ところが又ある方面では移民問題を扱う以上日本の出先官憲と接衝が多くなるので、水島氏の為めにも、バストスの為めにも此の際奮起してもらおう必要がある。又若田氏に對する世評も悪くないようである。温健な人材が高く買われているのである。

しかし前記の二人とも正式に会長就任の交渉は受けて居らぬ由であるから、常識から云うと、当選してしまつてから、引受けるのは何か、この重量感を欠くようが散はしないだろうか、アタがわかれてはおもしろくないというのは、このこととを指したつもりである。

それとも魚策の如く見せて、シヤニムニ世論かくの如しと岩口氏を指す秘策であらうか。

いづれにせよ、こんどの連日會總會は脚光まはゆき大芝居で、只の見物ではもつたいないような気がする。(末)

### 紀元節

日本に紀元節がなくなつて十一年位になる。去る二月十一日(月)ホリニアを見て思い出したことを、建国祭でも紀元節でも然る可き名称をつけて早く作り相なものだが、中々できないうちを見ることが、建国の歴史が学問的であつて立證しがないからである。日本はいつ頃できたものか、史家にも種々な解釈があるものがあるが、二千年以上の古代のしかも文字の無かつた時代の事を、何月何日とと調べぬものでもあるまいから、神武天皇が実在の王者であつたという同違いない文獻(古事記の如きもの)によつてさめるより仕方があるまい。建国記念の日といふのは、なされない話だ。

SAPATARIA HAYAKAWA  
早 靴店  
ハキヨイクツ カルイクツ  
ツヨイクツ



カルナバル よう  
きれいな おどりぐつ

### 定期總會御通知

定款第二十四条により来る二月二十二日第二十三回通常總會を開催いたします。

第一回 招集 午前九時  
右第一回招集后二時閉後、定款第二十七條により第二回招集を行います。

同日午前十一時に開催いたします。  
招集日時 二月二十二日午前九時  
場所 バストス産業會館

### 議案

- 一 決算報告承認に関する件
  - 一 東年度事業計画に関する件
  - 一 監事改選の件
  - 一 其他緊急事項
- 一九五七年二月十一日

### 組合員各位

バストス産業組合  
理事長 畑 中 忠 雄

今年から、この仕事を始めました

カミニオン、トモイウエ、の  
リッセンサを取るときは  
せひ 函 綴 事務所に  
御用命下さい

迅速 丁寧

# アラード債が

きこまりました

アラード債は普通のテラウで

ニコント二百〇〇・〇です

ナラぬとしか、その代仕奉りしたくは、  
双方協議の上、取りきりな事にします。

バスター  
トラットーニル組合

御礼

金巻封

故母堂様七年忌祭大々修に際し御書送致  
厚く御礼申上げます

阿部二郎様

阿部二郎様

御礼

金巻封

故母堂様七年忌祭大々修に際し御書送致  
厚く御礼申上げます

バスター不賛英弁

市川清佑様

# ブラジルの書籍

フラジル語の本

取次販賣いれまます

1 幼年用一本いれい

2 カルツボ(小学校)期

各学年の讀本その他

3 ジナジオ(中学校)用

各学年の讀本その他

4 高高校 師範 各学年

教科書一式

5 各種参考書 単行本

6 英語 フランス語 ラテン語の讀本

各種ジシヨナリ

7 其他有益な雜誌 書籍

何れも取次ぎ致します 御来店を待たします

代金は本が届いたかの申受けまます

小林印刷書籍部

C.P.一三〇番

係リ 小林 多満子

ジュラシイ、アルカイス

アセカニード

# フレシデンテ フルテンテ

## 実習農学校(フセタ エスコラ)

は中々よい がッニウ

昨年十月頃の邦字新聞にフルテンテ  
中に農学校ができて、校長は溝口茂雄とい  
う日系の先生が任命されたという記事が  
出て居たのを御記憶でしょうか。

バスター不賛英弁の農学校へ入学した生  
徒二人もあるの事皆さん御存知ですか

一人は、この話題提供者の中国年人さん  
の息子で生(KEI)君、もう一人は上村大  
八郎さん(KEI)君、共に共にか  
カマタ空軍十回歳の少年です。溝口校  
長は、二人も入学できるから、と、

農学校に入学せよと宣伝したので、本年の  
初入学定員六十人中五十人が日系と併  
いで、中国さん二人です。本年は  
二月十日に入学試験があつて、二月十五  
日か、十六日に入学式があつたが、今年、多  
くの人、バスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい  
農学校にバスター不賛英弁の多勢行くとよい

# 北米南米股旅記

サイトウ・ノリシチ口述

○製菓会社から硝子会社へ  
マクスネシア工業へ転々と

前回に一寸述べたハークネス会社というのは高峯松士と深い関係があり北米中部テトロイド市にある。松士のパテントを多数買収して製造をしていた。又高峯松士は北米で成功した人で、日本でも北米でも名の通った人だが、ジブソン如き親戚でなく知れぬでもない後輩に対し、属々骨を折って世話をしてくれられた。この恩義に對しては常に畏敬し感謝していた。

ジブソンの就職したマルホード会社も北米では有数の大製菓会社でブラジルのサンパウロ市にも支店がある。野口英世松士などが常に入社したバクテリオリヂの大会社をブラテルアから十四五哩の田舎所に傍系会社として経営していた。又硝子製造会社はニューチャールズ州に別に経営していた。

ジブソンが薬学専修でない事は会社の幹部も知っていたので、分析化学を实地に修めた頃を見計って硝子会社へまわされることになった。一九一七年頃第一世界大戦の末期であったが、この会社を使う如き虚が独乙からの輸入であったものが杜絶してしまひ、旋方なく代品を作ることに存った。ブラテルアの対策即ちデライトリーキンタ会社の処取地の製造をばじめた。北米には加里の原礦が少いのこの会社ではミカケ石から抽出した。この資本を有する会社なら横車を押し、その戦時中の露余の一策と思われた。勿論海草から硫酸を採取する時式だが、加里の採取法として不可能では無いが、いかんせんその工程は実に困難を極めたものがあった。ミカケ石中の加里含有量なるものは一%乃至一五%が最高である。実際の採取量は僅かに七%又はせいぜい八%だ。外国品輸入不可能時代で一ポンドが一ポンド五仙とする時だから、無謀的な大資本を投じてもらいぬいたが平時ならともなひできる仕事ではなかつた。この工場、ジブソンは転勤されたのだった。ジブソンはこの化学工業に筆を染め、またまた一文をのこし且つ発表したもののだが、週報の編輯者が読者はそんなものに興味はないと云ふものだから、残念なう涙をぬいて、工程や作業のセンソンの話はやめることにもなる。



## 取扱開始

昨年来、当地生産のポンカン販売に  
ついて、聖市中央会と交渉中の処  
話合いがまとまり、メルカードの  
バラツカで販賣取扱を開始すること  
になりました。

有利に且つ親切に取扱いますから御  
利用下さい。

輸送用木箱も用意してありますから  
御申込み下さい。

尚 詳細は養鶏部の

松本 係員に

御座ぐお下さい

バストス産業組合

組合員各位

Coop. Agri. de Pastos

### ATENÇÃO!

こちらは、ミシンしゅうせんで、  
まいと、ごひいきに、なっております。  
芝伯明で、ございます。

○しゅうせんちんについておしらせ、いた  
します。

全分解の、はあいは

四百クルゼーロ

いたございます



ニスぬりかえ  
チンタぬりかえ

○また、ミシンのちゅうしの、わるいとき  
みこくれとの、ごふうめいが、ときどき  
あります。

○ニちうから、しゅうちゅう、レオすとき  
は、百クルゼーロいたございます。

ペツサせい、じっひを  
いたございます

バストス・バール 西野さま方

芝 伯 明

(住所) リンス市カンホスサレレス街八二〇番

六葛十翁のうらみ

その後、彼は東部地方でエラソトの炭  
 鉱コクネシウム会社に入ることになった。  
 北米では一度或る会社に入ると充分仕  
 事をするし、信用を得ると、あとは大差  
 がある。學歷より實際仕事ができるかどう  
 かが問題で、履歴書を出せばよいといわ  
 れる。又その評判の人物を左右せよう  
 といふことも、評判のよい学校を優等  
 卒業して、いそいそと仕事に就く。彼  
 は、いそいそと仕事に就く。彼は、いそ  
 いそと仕事に就く。彼は、いそいそと  
 仕事に就く。彼は、いそいそと仕事に  
 就く。彼は、いそいそと仕事に就く。  
 ... (The text continues with a dense, repetitive style, likely a transcription error or a specific literary device in the original document.)

バスト不歌会報

二月十日山本一男居に於て第七十五回  
 例会を開催。出席八名、欠席投稿二名。  
 總得点144点、11菊子、和枝、8羊鈴  
 高 点 哥  
 山本和枝  
 訓話めく事をし時に散て言ふ  
 感傷多き少女期の子に  
 吹本菊子  
 憎まれつ厨にひそむこの暮の  
 遠くは遠ふもいつか戻りて  
 (以下一人一首)  
 長雨に伸びるがままに枝はりて  
 花のほしきかりアサルピア  
 森重羊鈴  
 池に浮く鮮やかな三十数匹を  
 かきえし時に黒鯉も浮く  
 宮武勝甫  
 病む我を師とする華道の社中より  
 替古日を休まずと便り未て泣く  
 いさかいて心淋しく件々庭に  
 音もなく散るバラの葉の  
 浅田孤舟  
 稲光を空みてあれはジャズミンの  
 淡き包ひす 暗き裏庭に  
 重道千代子  
 夜涼し池にゆらぐ水蓮は  
 月の光に青白く見ゆ  
 工藤勲一



理想的な  
**メラニリア**  
 センチ種子

好評の二世大丸

一、昨年の大収穫で大好評の直末品  
 日本より直末の **大丸種**  
 二、当店販賣昨年の二世大丸種

金儲けの秘訣は(夫礼作)

弊店で 御教示申上います  
 スイカに **肥料**

Casa Maeyama

前山商店

PHONE 二十六

有名な一流会社の肥料、取次  
 があります  
 現金 三月五ヶ月払御相談  
 に応じます

ツツパン一の信用ある  
時計・貴金属は  
信用ある店をあそび



老輔

AV. TAMOIOS. 785  
TUPA  
FONE 1234

Nossa Relojoaria  
ノッサ時計店

バストスの読書家にも申す  
アンドウペンパチ著  
ブラジル史  
河出書房新社  
一八〇〇年

ノルテステの風土と社会  
執筆者 中尾慈香  
著者 藤原志  
休庵堂の請氏

ブラジルに居てブラジルを知らぬ日  
本書によって一度にブラジル通となささい  
東次所 バストス週報社

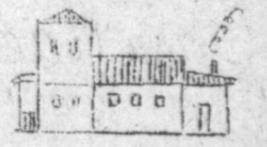
乙彦隨筆集連載について

今や浴陽の紙價と高めのつある乙彦隨筆集連載のケイヤクを乙彦と結びました。週報社はピンホリで社員に月給を支払わんと意口をいふおれしたのも実は乙彦氏が社長の最も痛い処をついて来ます。それ故今度のケイヤクでは、先結婚エビウを売りとはい、現金五万円を先払い致しました。途中で乙彦集がされるような事があったら、女房の乙彦氏が着服せるものと御判定下さい。前口上り

居留守

浦島乙彦

永井荷風は「今留守です」と逢い度くない人に向って相言ったおれをうな。内田百閒先生に到っては「留守」と家人に言わせる。再度要される。御本尊がツカ／＼と玄關に出て来て「本人が留守と言ったんだから間違いない」と一喝したと云う。堂々たる居留守振りの至芸!と荒垣天声人語氏は感嘆して居る。新報のウイリアンテがくると「パトロソ



すばらしい  
住宅地分譲

湖水の沖をヨットが走る  
うちの窓からよく見える  
此のたびブラジル拓植組合や  
サンパウロ市サントアマール人造湖  
畔ジヤルジニリオホニートの住宅地  
分譲を開始いたしました。地植は絶  
対確實な好条件で分譲して居ります。  
御子孫の将来の爲めに確實な投資と  
存じます。

是非一度御相談においで下さい。  
(風光明媚な住宅地)  
ブラ招製糸会社事務所  
崎田春一

乙彦「留守」と云って遠返す南天子先生の居留守振りも堂々入っている。サンパウロ口の某慈善団体の某伯人が毎羊寄附金集めにやっつけてくる。インギンにして燕社と言った感の奴で丁重極めた挨拶と握手。そのアヨアヨとハンペンの如き愛融文で虫ツの走る嫌な奴なので一先一度の居留守をつかつた。「たしか産組の階上に居る苦だから後刻来たまえ」と帰らせた。その内忘れられました。組合階上の会合に顔を出した。トクノに先刻の奴がノコノコ上って来て、浦島さんはここに何を居られませんかと妙な顔をして言う。周囲の人々の手前引込がつかかす。直敷い。致方ないから立替わらうと。とうとう私が私の代役をして結局金はとられず。居留守つかいも名人でなわれわれには仲々骨の折れるものである。お母鈴の又鳴る居留守昼寝中

電話話

浦島乙彦

これら天声人語荒垣氏の話だが、電話口に人を呼出しておいて「貴方をれ」とくる。西洋流かも知れないが、日本流な

ら、自分の名前から先に名乗るの作法の苦。一番痛にさわるのは、時あした相手の手を待たせておいて本人が伸を出来ないう場合、一寸おまち下さいと返事が言われて、おい分たつてから足音が遠くから受話器には、いって来る。かすた音が待つのには当然だが相手を待たすのけ失礼千万。又その人程自分で直接かけない。取次の本人がようやく奥の院から出てくる。それがエライのなと思っている。

荒垣氏程の人も電話ではシラにさわる事に出会い勝つ。電話が再開した。案外バストスにも電話が再開した。案外電話のエキエトを心得ていない田舎者が多い様だ。天声人語氏をして、ガカシメなコエライ者と思いきい違ひをして、いる手合が少くはなさそうだ。

嘗て筆者が某の華僑所にいた頃、フラ松の松本高信さんが、居り処へ電話をかける時、大ていA君がアテンテする。取次る時には必ずA君不在の時だ。電話は君がアテンテ鳴らる受話器を手にとると、これがアテンテで、いっている者の神聖であり、エキエトをいって、そういってA君を激賞した。顔が見えないからとは言えない。人柄は電話のかけ方で、うかがわれるものだ。

電話機のヒモは、おじれ放題、受話器の手はアテンテでぬるぬる、口に当るところはアテンテと悪臭が鼻をつく、これもやりきれない。電話は現代生活の神聖なるものか、機械の扱方も電話作法も、話言葉も、もつこスマートにスッキリとしたまえ、天声人語は電話作法の一文をかき結んでいる。

私も至極同意だ。日本には電話器消毒の会社もある。毎週一回位消毒液を持つて来て口の当る処を消毒したり、埃を払ったりするのが仕事だ。個人専用受話器がない限り他人の、しかも何ものとも知らぬ人々の口を接近させていて毎日平気で居れると言ふのも、考えて見ると無神聖すぎる様である。

受話器消毒会社を設立してはどうであらうか。

○受話器置く冷たき言葉耳に未だ

踏破 千山 万山 獄之煙

水部田商店に付いては鏡畑タオ君は、晩学作中文字をうえ、なんとセンクアコに入学の為、夜を費やして上理した。行手にかかる千山、万山、何物も、意気軒とふふ可し。又西川薬局に勤務の信太八郎君、オレも思ふに、薬劑師と人と相い、いせ、入学の準備中とか、アスマル街では二人の商店子、養を勉強のわのサ、ンバウに送ることになった。去る某日、社行会を催して二人を呼びおきた。商店街美談のおまつり、

新学期にそなえ  
学生用 マンネンヒツ (カネツ)  
パールケル 二十一を  
五十本限り 大割引で  
差上げます

高田時計店  
イヨイヨ  
ミトリヨ・デブリアノ  
トキニナリマシタ  
ミリよの脱粒は  
仕事の前早く親切な

野沢一衛へ  
カネイヤの向側  
坂垣薬局前夕マゴ組合の  
阿部兵申込んで下れば、すぐ届きます

Casa Taroda

魚、なんだ、なんだ、水爆！  
海底異変

天から降った  
奇蹟の  
マナー

畑に施肥した  
奇蹟のマナー

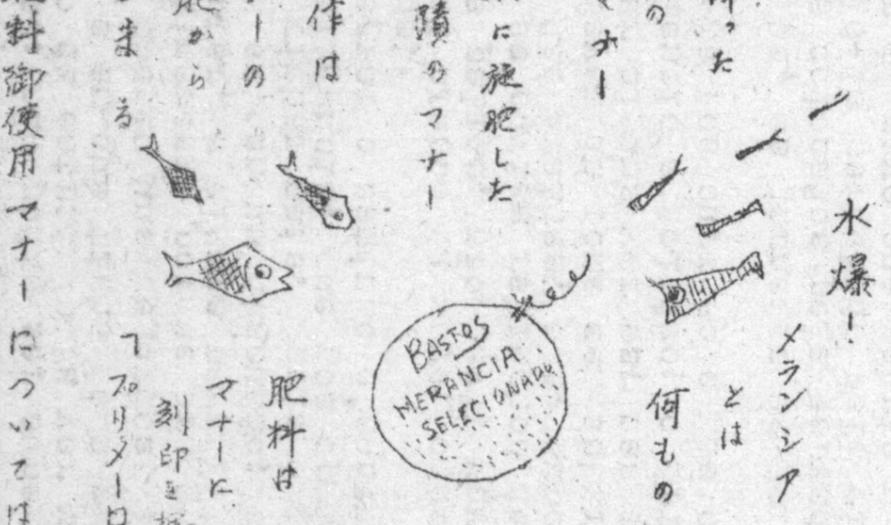
豊作は  
マナーの  
施肥から  
はじめまる

肥料は  
マナーに  
刻印を  
7.70リメーロ

西瓜肥料御使用マナーについて  
御相談いたします

太郎田商店

PHONE. 16



Essas caricias consolavam de tal modo "Capi" que o faziam ás vezes esquecer, creio eu, a morte dos seus camaradas; não podia ser superior aos seus hábitos, e parava de repente no meio da estrada para ver vir a tropa, como no tempo em que era o comandante e em que tinha de a passar frequentes vezes em revista. Mas isto durava apenas uns segundos; e memoria reavivava-se-lhe e Lemorando-se repentinamente porque era que essa tropa não vinha, passava-nos adiante a correr, e olhava para Vitalis tomando-o por testemunha de que não incorrera em nenhum descuido; se "Dolce" e "Zerbino" não vinham, é porque não vinham mais. Fazia isto com uns olhos tão expressivos, tão cheios de intelligencia, que nos oprimia o coração. Isto não servia muito para nos alegrar o caminho e contudo precisavamos tanto de distração, eu pelo menos!

Por todos os campos se extendia o lençol branco da neve; o sol não brilhava no ceu, estava uma claridade ruiva e pallida; não havia movimento nos campos, nem aldeões no trabalho; não se ouviam relinchos de cavalos nem mugidos de bois, apenas o grasnido das gralhas, que, empoleiradas no mais alto dos ramos desnudados, gritavam de fome sem acharem na terra um lugar onde descessem para procurar alguns vermes; nas aldeias não estavam as casas abertas, era tudo silencio e solidão; o frio é aspero, fica-se á lareira, ou então trabalhava-se nos curraes e nos celeiros fechados.

Os quilometros juntaram-se aos quilometros, as jornadas ás jornadas aproximamo-nos de Paris e mesmo que os marcos collocados pela estrada fóra, me não estivessem avisado disso, eu te-lo-ia percebido pela circunlaccão que se tornava ativa, e tambem pela cor da neve que cobria o caminho e que era muito mais suja que nas planícies da Champagne. Coisa admiravel, pelo menos para mim! não me pareceram os campos mais bonitos, nem as aldeias diferentes das que tinhamos atravessado alguns dias antes. Ouvira tanta vez falar das maravilhas de Paris que na minha ingenuidade imaginára que essas maravilhas se deviam anunciar ao longe por alguma cousa extraordinaria. Não sabia ao certo o que devia reparar e não me atrevia a pergunta-lo mas enfim esperava prodigis, arvores de ouro, ruas ladeadas de palacios de marmore, e nessas ruas habitantes vestidos de seda; parecer-me-ia isso perfeitamente natural.

Não obstante a atencção com que estava á procura das arvores de ouro pude reparar que as pessoas que nos encontravam já não olhavam para nos; iam, de certo, muito apressadas, ou estavam talvez habituadas a espetaculos mais dolorosos do que o que nós podiamos oferecer.

Isto não era nada animador. Que íamos nós fazer a Paris, naquele estado de miseria em que nos achavamos? Era a pergunta que eu fazia a mim mesmo com ansiedade e que bastantes vezes me occupava o espirito durante aquellas grandes caminhadas.

Bem quiesera interrogar Vitalis, mas não me atrevia a fazê-lo, tão triste ele se mostrava e tão laconico nas suas communicações.

Um dia, finalmente, dignou-se tomar lugar a meu lado, e pelo modo por que olhou para mim senti que me ia dizer o que eu tanta vez desejara saber. Era manhã, tinhamos passado a noite numa quinta, a pouca distancia duma grande aldeia que, segundo diziam os marcos azues do caminho se chamava Brissy-Saint-Léger. Tíhamos partido de madrugada, e depois de termos costeado os muros dum parque e atravessado em todo o comprimento a aldeia Brissy-Saint Léger, tíhamos visto na nossa frente, do alto duma encosta, uma grande nuvem de fumo escuro que pairava por sobre uma cidade inensa da qual se podiam apenas distinguir alguns monumentos altos. Eu abria os olhos para diligenciar reconhecer-me no meio daquela confusão de telhados, de campanarios, de torres, que se perdiam em neblinas e em fumos, quando Vitalis, diminuindo o passo, veio collocar-se a meu lado.

- Eis pois a nossa vida mudada, disse-me ele como se estivesse conversando uma conversa encetada ja ha muito tempo; daqui a quatro horas estaremos em Paris.

- Ah! é Paris que está acolá em baixo? - Mas, de certo.

To mesmo instante em que Vitalis me dizia ser Paris que tíhamos na nossa frente, saltou-se do ceu um raio de luz, e eu pude ver, rapidamente como um relampago, um reflexo dourado. Decididamente não me enganara; ia encontrar arvores de ouro.

(Continua). -